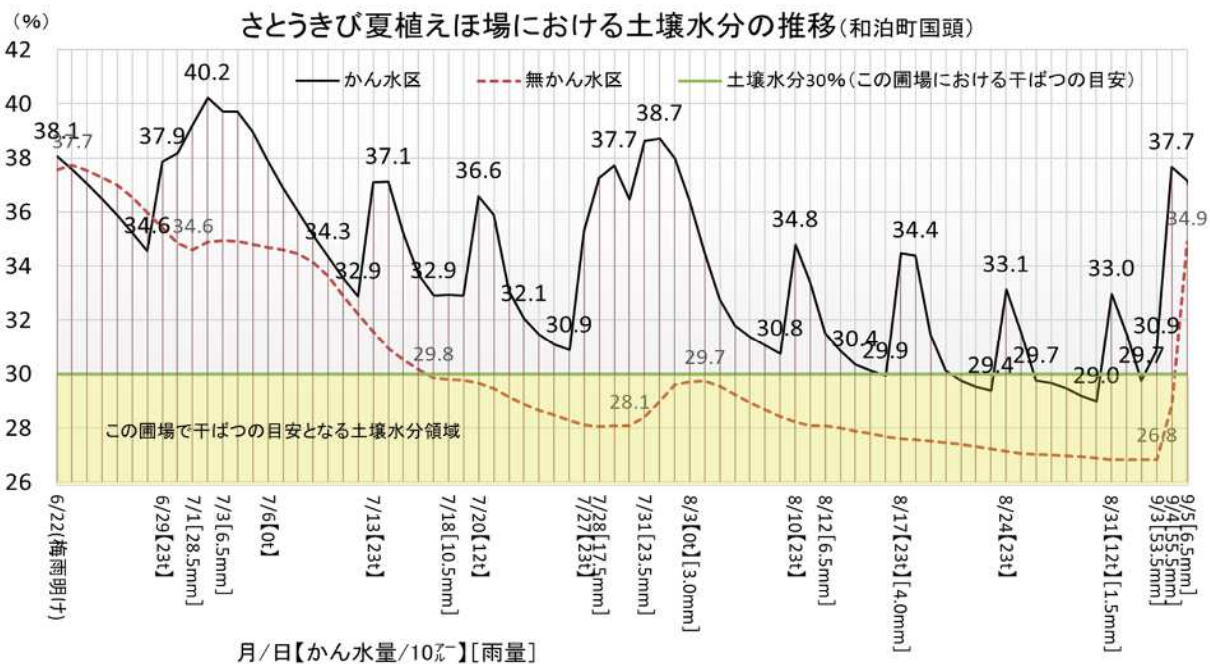
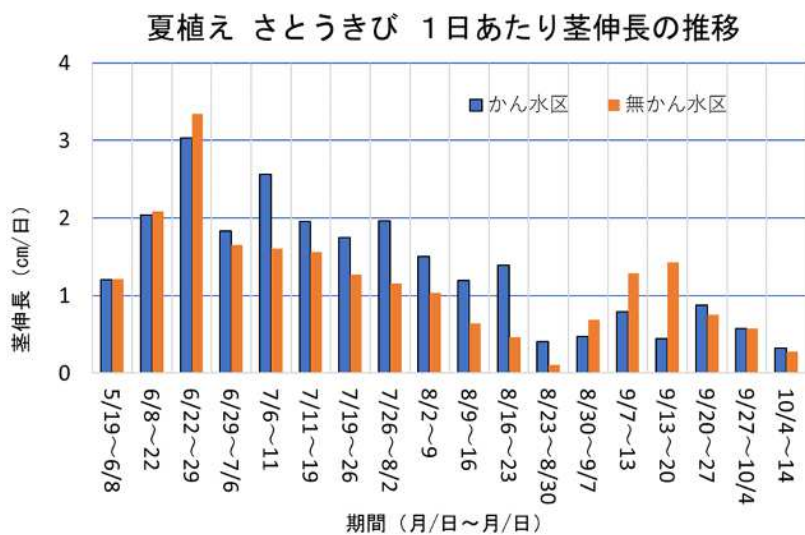


さとうきび夏植えほ場（品種：はるのおうぎ）で、令和4年の梅雨明け後、週1回23t/10aを計画的にかん水した区と無かん水区の、土壌水分と生育を調査しました。5～6月の総雨量は平年比171%で平年より土壌水分の蓄えがあったと思われ、7月には5回の有効降雨（日雨量5mm以上）もありましたが、8月はほとんど降雨がなく、9月は台風に伴うまとまった降雨のある条件でした。



かん水区の土壌水分は、かん水後3～4日でかん水前の水準まで減少し、ほとんど降雨のなかった8月には長期的傾向として徐々に減少しましたが、このほ場で干ばつの目安となる30%以上を概ね確保できていました。一方、かん水せず干ばつ状態が進行すると、その解消には50mmを超えるようなまとまった降雨が必要でした。計画的なかん水により、無かん水時には無効となる程度の雨量の有効化も期待されます。



サンプル茎調査 (cm, g, %)

項目	かん水区	無かん水区
原料茎長	254	236
一茎重	930	853
ブリックス	上部	21.8
	中部	20.7
	下部	20.9
	平均	21.2

かん水区の茎伸長は、かん水開始後まもなく明らかに良くなり、かん水効果は8月下旬まで確認できました。また、かん水区における1茎当たりの生葉数は、8月上旬から9月中旬まで、無かん水区より1枚程度多く推移しました。

なお、11月末時点の各区のブリックス（糖度の目安）は、茎の上部・中部・下部いずれも概ね20%以上で、かん水の登熟への悪影響は認められませんでした。